



～礼儀と節度を考える～

平成武師道

〈人間活動学〉

人間は賢い生き物である。
また、愚かな生き物でもある。



人間とは何の為に生まれ、何の為に生きているのだろうか？
このような悩みを哲学者達は年がら年中、考えているらしい。
しかし、いろいろと意見を述べ、答えを導き出そうとするが、
結局、答えはなかなか見つからず「神様しか分からない」
という結論になるのである。

全ての人間は、何から何までが同じではない。
だから考えや意見も合う事もあれば、合わない事もある。
これが当たり前だ。
自分自身の考えや意見を理解できない者に押し付けると、
必ずそこには争いが生じる。

人間とは本当に身勝手な生き物である。
難しく、扱いにくく、面倒臭い生き物である。
人間の世界は、いつまで経っても争いが
絶える事はないだろう。

憎悪、嫉妬、裏切り、劣等感。
心の闇の部分に蠢く感情。思い通りにならなかったり、
順調に物事が運ばなかったりすると沸き起こる感情。
人間はこれらの感情との闘いに、どれ程迷い悩んだ事だろう。
一瞬は克服したと思っても、

再び心の中に闇が顔を出してくる。
もがいても、もがいても抜け出せない泥沼地獄。
人間は決して一人では生きていけない。
それなのに誰かに対して沸き起こる悪い感情。
結局、自分で自分の心に闇を作っているのだが、それにさえ
気付かずに、甘えて何も見ようとせず、逃げていく心。
人間は弱いものと分かっている。
だからと言って、全てが弱いとは限らない。

逆に心の闇に苦しい思いをしてまで、何とか光を照らそうと
する事もあるのだ。ある意味、人間は不思議な生き物だ。
私自身も考えれば考える程、

分かるようで分からなくなってくる。
やはり答えは神様だけが知っているのだろうか。
それでは、神様はどこにいるのだろうか？
天国なのだろうか？
それでは天国はどこにあるのだろうか？
宇宙の彼方なのか、ドラえもんみたいに机の引き出しを

開ければ、そこに在るのだろうか？
それは生きている人間には分からない事だと思う。
しかし、それを考えて答を出そうとしている
人間がいる事は事実である。

しかし、それを考えているのは心なのではないだろうか。
それでは、その心自体にもっと光を照らす事を
意識をしてみてもどうだろうか。
私は光を照らすという事は自らの細胞ひとつひとつに

エネルギーを作り出し、活動していく事だと思っている。
しかし、そこまで考えている人は少ないのではないだろうか。
だからこそ、考えられる時に考え、
動こうとしようとする時に動いてエネルギーを作り、
己のケツを叩かなければならない。

自分の周りに不幸が来てから気付いていては遅いのだ。
神様は己の心にいる。
そして、自らが動く。
結果が『賢い』と言われるのが、『愚か』と言われるのが動く。
ここに本当の神様が、己の心に現れるのではないだろうか。
運を天に任せる前に、まずは自らが切り拓いていこう。

希哉